

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2015.12) 平成26年度:93.

急性期病棟で終末期乳がん患者看護を行うことで生じる看護師の思いについて

布川 千恵実、植山 さゆり

急性期病棟で終末期乳がん患者看護を行うことで生じる看護師の思いについて

旭川医科大学病院 9階東ナースステーション ○布川千恵実、植山さゆり

【目的】

急性期外科病棟で終末期乳癌患者看護を行う事で生じる看護師の思いを明らかにする。

【方法】

急性期外科病棟に入院となった終末期乳癌患者の受け持ち看護師3名を対象に半構成的面接を実施、面接内容を逐語録へ起こし内容分析を行った。

【倫理的配慮】

研究の目的・方法、参加の自由性、情報管理の徹底・匿名性を厳守し公表する事を説明し了承を得た。本研究は旭川医科大学倫理委員会の承認を得た。

【結果】

《患者と十分に関わる時間がない》は（患者と関わる時間が少なく焦燥感がある）、《専門的知識技術の欠如》は（乳癌・ターミナルケアの知識不足）、《関係性構築の難しさ》は（信頼関係構築の困難感）（性別の差による戸惑い）、《家族支援の難しさ》は（家族ケアに踏み込めない）、《終末期乳がん患者看護に対する後悔・無力感》は（後悔・無力感がある）（未告知患者との会

話が困難）で構成された。《患者の希望を知りよりよいケアを提供したい》は（患者の希望を知る）（自立心自尊心を大切にする）、《達成感》は（患者家族の目標達成時に感じる達成感）、《多部門との連携・情報共有の必要性》は（多部門との連携や情報共有が必要）で構成された。

【考察・結論】

急性期外科病棟では周手術期患者への臨床業務に時間を要しており終末期乳癌患者とゆっくり関わる事が難しい。患者は他病棟で治療を行っており看護師は患者と関わる時間が短く信頼関係の確立が困難である。看護師は専門的知識の欠如が影響し終末期乳癌患者との関係性構築に困難感を抱いている。また患者は壮年期女性が多く男性看護師はより強く戸惑いを感じている。結果、思い描くケアが実践できず不全感が生まれ後悔・無力感を生じている。このような中、看護師は患者の希望を知り個別性を考慮した質の高いケアの提供を目指している。多職種との連携は、知識の向上、不全感の緩和となり終末期乳がん患者の看護の質の向上に重要である。